

Title	英語を使うことに慣れる場としての英語キャンプ：葛飾区イングリッシュキャンプの実践化から
Author(s)	東, 仁美
Citation	聖学院大学論叢, 第 28 巻第 2 号, 2016.3 : 103 -118
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5583
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈研究ノート〉

英語を使うことに慣れる場としての英語キャンプ ——葛飾区イングリッシュキャンプの実践から——

東 仁 美

抄 録

東京都葛飾区教育委員会は、英語を使う場を中学生に提供することにより英語学習への意欲を高めることをねらいとした「葛飾区イングリッシュキャンプ」を2015年度から開催している。本稿ではこのキャンプの概要、参加生徒へのアンケート調査や指導した英語科教員からのフィードバックを検証し、効果的な中学生向け宿泊学習のカリキュラムを提言する。

キーワード：英語キャンプ、英語漬け体験、教員研修、海外派遣

1. はじめに

東京都は2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、小学5年から高校3年生までを対象とした「英語村」開設計画を進めている。都の有識者会議は、英語を「教える場」ではなく「使うことに慣れる場」とすることをコンセプトとし、国内にいながら英語漬けの生活が体験できるように、原則日本語の使用を禁止して外国人講師から実践的な英会話を学ぶことができる施設の設置を提言している（毎日新聞、2015年10月27日）。

英語村に関する有識者会議の報告によると（東京都、2015）、英語を使って積極的にコミュニケーションをしようとする態度を身に付けるには、座学の授業だけでなく、体験や実践を効果的に活用することが重要である、とされている。

また、2015年11月には、大阪府吹田市の大型複合施設で「教育とエンターテインメントが融合したエデュテイメント施設」としてOSAKA ENGLISH VILLAGEが開業された。「英語ネイティブの講師と一緒に、アメリカの歴史・文化・祝祭・日常生活をベースにした多用なシチュエーション別の英語表現を学び、練習できる」場として、平日は学校団体が学外授業として活用することを想定している（OSAKA ENGLISH VILLAGE, 2015）。

日常生活では英語を用いたり、異文化を体験したりするような機会が少ないことが指摘され、こ

のような英語村の構想が各地で進んでいる中、北海道教育委員会(北海道イングリッシュキャンプ)や東京都荒川区教育委員会(荒川区ワールドスクール)などでは宿泊型の英語キャンプを実施しており、その英語漬け体験の成果が報告されている(北海道教育委員会, 2015; 東, 2014など)。宿泊型学習以外では、東京都品川区が昨年度から授業時間内に小学校4年生を対象にした1日型のイングリッシュキャンプを始動した(品川区, 2014)。また、大阪府寝屋川市では、2015年度から小学校「英語村」、中学校「英語村」を開設し、小中一貫教育で身に付けてきた英語力を一層向上させ、グローバルな視点を持ち、世界に羽ばたく子どもの育成を目指している(寝屋川区教育研修センター, 2015)。

このように英語を「使うことに慣れる場」の設定が様々な形で試行される中、葛飾区教育委員会は、2015年度から中学生対象の1泊2日の英語キャンプ開催を決めた。筆者はアドバイザーとしてキャンプのプログラム開発に携わり、1泊2日という限られた日程の中で、「英語を使うことの動機付けを高めること」をねらいとした、中学校1,2年生対象の2つのカリキュラムを作った。本稿では、このイングリッシュキャンプの実践報告を通して、中学生が英語を「使うことに慣れる場」の設定について考察していく。

2. 葛飾区イングリッシュキャンプの概要

2.1 葛飾区の教育施策

東京都葛飾区は、グローバル社会をたくましく「生きる力」を育成することを学校教育の施策として掲げている。葛飾区教育委員会は、グローバル人材育成を目指して、英語教育の充実や21世紀型能力の育成に取り組んできた。2015年度は小学校英語科に対応するため、外国人英語指導補助員の1日常駐、栃木県日光にある葛飾区の宿泊施設を活用した小学校6年生の「日光移動教室」への外国人英語指導補助員の派遣の他、中学校1,2年生の英語宿泊学習(イングリッシュキャンプ)実施を決定した。

葛飾区イングリッシュキャンプの募集要項は、5月に各学校に配布されたが、48名の募集に対して約150名の応募があった。応募に際して、応募理由の作文が提出され、学校長の審査により、各学校から原則2名ずつの参加者が決定された。

2.2 葛飾区イングリッシュキャンプのプログラム開発

筆者は葛飾区教育委員会からの依頼を受け、このキャンプのプログラムを企画した。荒川区ワールドスクールの中学生プログラムを開発した経験から、4泊5日程度の宿泊学習の成果は実証済みであったが(東, 2014)、今回は1泊2日という短期のキャンプであるため、メインキャンプの他にプレキャンプとポストキャンプを設定することで期間の短さをカバーすることにした。葛飾区イ

表1 2015年度葛飾区イングリッシュキャンプのスケジュール

	日時	場所
プレキャンプ	7月11日(土) 14:00～16:00	葛飾区立立石中学校
メインキャンプ	7月30日(木)～31日(金)	葛飾区日光林間学校
ポストキャンプ	10月3日(土) 14:00～16:00	葛飾区総合教育センター

ングリッシュキャンプは、表1の日程で実施された。

2.3 プレキャンプ

メインキャンプに先立って行われたプレキャンプでは、参加者全員(団長、副団長、引率教員12名、ALT8名、参加生徒50名、アドバイザー、区教育委員会担当者)の顔合わせとともに、オリエンテーションを通して、英語だけで過ごすことに慣れる機会を設けた。まず、キャンプの教材として作成した「キャンプで役立つ英会話」(資料1)の冊子を使い、ALTの指導の下、キャンプ中に使える英語表現を練習した。その後、グループに分かれて、自己紹介や簡単な英語のゲームを行った。参加生徒は、グループを担当する英語科教員やALTと英語で会話をし、キャンプがどのように進められるかを体験することができた。

参加生徒が解散した後、引率教員全員でメインキャンプの打ち合わせを行った。まず、アドバイザーが英語キャンプの目標を説明し、その後、英語科教員とALTはレッスングループを担当するペアごとに指導案を検討した。ALTは葛飾区が契約するALT派遣会社所属の外国人英語指導補助員で、同区立中学校での英語指導も担当しているため、英語科教員との打ち合わせはスムーズに進んだ。

2.4 メインキャンプ

2.4.1 キャンプのスケジュール

メインキャンプは日光にある葛飾区の宿泊施設で実施された。葛飾区からの移動の所要時間は片道約2時間半だが、英語漬けの環境を作るために東京を離れ、1泊2日で宿泊学習を実施することとした。また、移動時間を有効に使えるように、引率の英語科教員が移動のバス内でのレクリエーションを担当し、行きのバス乗車直後から英語での生活を始めた。メインキャンプのスケジュールは表2の通りである。

表2 メインキャンプのスケジュール

7月30日(木)		7月31日(金)	
8:00	葛飾区役所集合, 出発	6:00	起床
11:00	葛飾区日光林間学校到着 開校式	6:30	朝の活動
12:00	昼食	7:30	朝食
13:00	研修開始 各学習室にてグループワーク	8:30	研修開始 各学習室にてグループワーク
16:00	全体活動	11:00	全体発表
17:00	夕食準備, 入浴	12:15	閉校式
18:00	夕食	13:00	宿舎出発
19:00	ナイトウォーク	13:30	昼食, 買い物
21:00	リフレクション	14:00	出発
22:00	就寝	17:00	葛飾区役所前到着 解散式

プログラムを策定する中で重視したことは、

1. 新しいことを習う場ではなく、既習事項を使う場とする
2. 2日目に発表活動を入れる
3. 生活の中で自然に英語を使える場を設定する

という3点である。4泊5日程度の宿泊学習であれば、集中的に学ぶことで新しい学習事項の定着も期待できるが、日光での滞在は就寝時間を含めてわずか26時間である。そのため、新出事項を導入することは極力避け、既習事項をうまく活用することで、無理なく、また、自信を持って発表活動にのぞめるようにした。

2.4.2 中1クラスの学習内容

中1クラスでは、小学校外国語活動での既習事項である I like ~. I have ~. I want to ~. を使って自分のことを伝え、友達のことを知る活動を行った。2日目の発表活動では、6名1組のグループで、「日本」、「東京都」、「葛飾区」のどれかを選び、グループごとに英語で紹介した。それぞれのグループでパワーポイントを使ったり、絵を描いたり工夫をこらした発表を行うことができた。以下は1年生クラスの発表例である。パワーポイントでトピックの写真を示しながら、1人2~3文ずつの英文で日本を紹介した。

We want to talk about Japan.

I like *maiko* girls.

Japan has four seasons.

I want to climb Mt. Fuji.

I watched Mt. Fuji on TV.

I like green tea the best.

- I want to drink green tea from Kyoto.
- I like tuna very much.
- I want to eat sushi.
- I like Donald Duck.
- I want to go to Tokyo Disneyland.
- I like *origami*.
- I like Japanese hospitality, *omotenashi*.

2.4.3 中2クラスの学習内容

中2クラスでは、自分のいいところや得意なことを英語で伝え、自分の将来の夢を英語で発表することを到達目標とした。ブレインストーミングをしながら、自分を表現する言葉を付箋紙に書き出し、I can ～. I'm good at ～. I'm interested in ～. の表現を使って、自分についての発表をしたい。中1クラスよりも学習内容のハードルを上げ、学校では習わない自分自身を表現する形容詞を学習した。宮澤賢治の「雨にも負けず」の英詩を朗読する活動を通して、自分が目標とすることを英詩で表現した。2日目の発表活動では、グループごとに「こういう人に私はなりたい」という宣言をした。以下はグループ発表の一例である。図1は発表で提示したグループのポスターである。

- I will be an English teacher.
- I will not give in to fear or failure.
- I will be a police officer.
- I will not give in to inactivity.
- I will be a bank clerk.
- I will not give in to being shy.
- I will be a pediatrician.
- I will not give in to failure.
- I will be a weather forecaster.
- I will not give in to misfortune.
- I will be a good cook.
- I will not give in to laziness.
- This is the person I want to be.

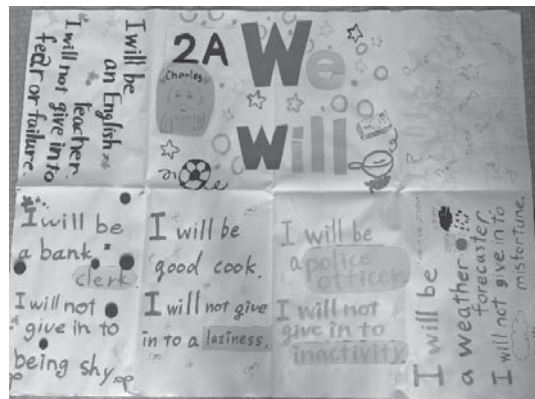


図 1

2.4.4 葛飾区イングリッシュキャンプの指導者

引率の英語科教員は、初任者研修の一環としてこのキャンプに参加した。キャンプでは、英語科教員と ALT とで各グループ6名の生徒の指導にあたった。引率教員のうち、区内中学校の中堅英語科教員1名が指導者のリーダーとして参加した。英語科教員と ALT はプレキャンプの際に事前打ち合わせをしておき、キャンプ中も生徒の入浴時間や夜のスタッフミーティングで指導内容につ

いて打ち合わせをする時間を持った。ALTの出身地の内訳は、アメリカ5名、オーストラリア1名、ジャマイカ1名、フィリピン1名であった。

キャンプ中、グループ担当の英語科教員は日本語を全く使わず、生徒とは全て英語で接したが、グループを持たない4名の教員は、生活面や学習面での不安要素を取り除くため、名札に“You can speak to me in Japanese.”のサインをつけ、日本語で会話ができるルールを設けた。キャンプの基本的な指導案はアドバイザーが提示したが、必要に応じて英語科教員が作成したワークシートや教材も活用された。

2.4.5 全体活動

メインキャンプでは、グループごとの学習活動以外にALTと英語を使って会話をする活動を企画した。その一つがWorld Bazaarである。この活動は、グループごとに8つのコーナーを回り、ALTに出身地の紹介をしてもらい、サインをもらうというものである。ALTは出身地の写真やコインなどを事前に用意し、わかりやすい英語で自分の出身地について説明した。生徒は「キャンプで役立つ英会話」の冊子にあるALTに質問する表現を使いながら、グループで協力し合って、英語でALTとの会話を楽しんだ。

また、初日の夜にはNight Walkという活動をした。これは、館内8ヶ所に隠れているALTをグループごとに探していく活動で、英語科教員が英語で案内しながら、消灯された館内を回る肝試しを楽しんだ。各ポイントで英語が書かれたカードを受け取り、8枚のカードを合わせると一つの英文になる、という学習的な要素も取り入れた。全グループがポイントを回り終えた後には、ALT全員が仮装のまま、ダンスを披露してくれた。参加生徒のアンケートでは、Night Walkが楽しかったという感想が多く寄せられた。

キャンプ期間中、ほぼ館内で過ごすプログラムであったため、2日目の朝は野外での活動を計画した。ラジオ体操を知らないALTに日本の朝の体操を教えるという名目で、英語版のラジオ体操を行い、その後、ALTが紹介する各国の遊びを体験した。体を動かすことで英語漬けの生活の緊張がほぐれたようであった。

2.5 ポストキャンプ

ポストキャンプは、メインキャンプ後2ヶ月経ってから開催された。葛飾区の中学校では月に1回、土曜日午前中に登校する「葛飾の日」が設定されている。プレキャンプとポストキャンプは「葛飾の日」の午後に開催することにより、ほぼ全員の参加者が出席することができた。グループ担当のALTも全員参加を派遣会社に要請していたが、うち2名はポストキャンプに参加できず、代替のALTがグループを担当した。ポストキャンプを参加者同士の再会の場にするために、来年度は参加生徒、ALT、引率教員を含めて全員が集まれるように日程調整することが課題として残された。

メインキャンプ後の参加者アンケートから「グループ以外の参加者と交わる機会がもう少しほし

表3 ポストキャンプ スケジュール

時間	活動	活動内容
14:00～14:10	Opening Ceremony	団長挨拶 ALT 1人ずつからキャンプに参加した感想、参加生徒へのコメントを聞く。
14:10～14:25	Icebreaking Game	司会2人の会話を聞き、キーワードの文字数でグループになる。男女混合、中1中2混合などルールをつけ、毎回違うメンバーでグループを作る。 (例 We went to NIKKO. Five words!) グループで円になり、司会者の質問に1人ずつ英語で答えていく。(例 Which school do you go to? What club are you in?)
14:25～14:40	Let's talk with ALTs!	キャンプのレッスングループに分かれ、グループごとにALTに質問をし、8人全員からスタンプをもらう。
14:40～14:55	キャンプの動画視聴	グループごとにキャンプの動画を見ながら、キャンプを振り返る。
15:00～15:45	グループ活動 学年での発表	グループごとにキャンプで学んだことを復習し、キャンプで楽しかったことや印象に残ったことを英語で発表する。
15:45～16:00	Closing Ceremony	生徒代表(学年ごと1名ずつ)からの挨拶 団長挨拶

かった」という要望があったので、ポストキャンプでは、参加者全員と関われる活動を入れることを工夫した。また、メインキャンプと同様、「英語を使うことに慣れる場」「英語で発表する場」として、表3の2時間のプログラムを考案した。

ポストキャンプは、事前に教育委員会と綿密に打ち合わせを行い、内容を十分検討して実施した結果、7月のメインキャンプを振り返るよいプログラムとなった。久しぶりに顔を合わせた参加者は、今後の英語学習への抱負を語り合い、来年度開催が予定されている中2対象の海外派遣プログラムへの参加に意欲を見せる生徒も見られた。

ポストキャンプ後には、引率教員が最後のミーティングを持ち、来年度の開催に向け、葛飾区イングリッシュキャンプの反省点、課題を話し合った。

3. プログラムの検証

3.1 参加生徒へのアンケート調査

メインキャンプ終了後、葛飾区教育委員会では参加生徒及び保護者にキャンプについてのアンケート調査を実施した。質問項目は、

1. キャンプを終えて、「英語をもっと学びたい」と思うようになったか
2. キャンプを通して、「自分の英語力が高まった」と感じるか
3. キャンプを通して、「仲間と協力する力が高まった」と感じるか
4. もう一度キャンプに参加できるとするなら、参加したいと思うか

の4つである。本稿では、キャンプのプログラム改善の手立てとして、1と4の項目を中心にアンケート結果を分析する。

英語学習への動機付けに関しては、参加生徒のほぼ全員が「英語をもっと学びたい」と思うようになったと回答していることから、1泊2日の宿泊学習は、英語学習への意欲を高める上で効果的であったと考えられる。

「英語力が高まったか」という質問に対する自由記載からは、1泊2日のキャンプの限界も読み取れた。「英語が前より聞き取れるようになった」「なんとなく、先生の言っていることがわかってきた」「最初行ったばかりの時は、他の先生に英語を話されても（難しくて）そんなにわからなかったけど、帰る時には Kevin 先生の言っていることが訳せたので、自分の中で英語力が高まったと思いました」という回答がある一方、「意欲は高まったが、英語力と言う意味では大きな変化はない。（自分は発音をもっとよくなりたいたいと気にしている）」「英語力が高まったかはよくわからないが、より興味を持ったと思うし、楽しいと思うようになったと思います」という回答からは、短期のキャ

表 4 キャンプを通して英語の学習に対して意欲的になったか

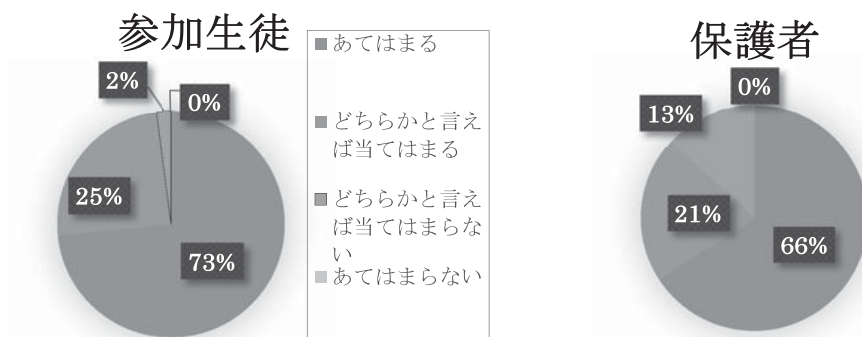
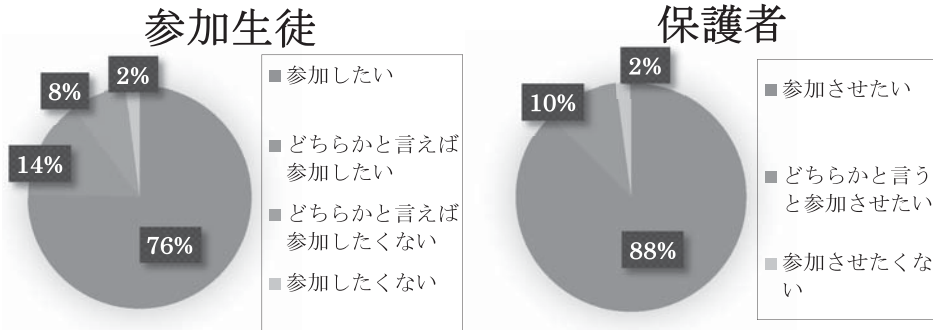


表 5 もう一度キャンプに参加したいか



キャンプでの達成目標に英語力の向上を掲げることは難しいが、意欲を高めるためには十分な効果が得られると考えられる。

参加生徒のうち90%が「もう一度キャンプに参加したい」と、また保護者の98%が「もう一度キャンプに参加させたい」と回答している。参加したい理由としては「英語が大好きな人たちと一緒に英語を学ぶことができるし、外国人の先生に教えてもらえるし、友達もいっぱいできるからです。とても楽しいからです」「違う学校の友達と仲良くできたし、バスや食事の時にALTの先生と会話もできて、楽しい企画がたくさんあって、おもしろかったから」という回答があった。他校の生徒と友達になり、学校とは違う、英語を使った楽しい活動ができたことは、英語キャンプの成果の一つと言えるだろう。

「どちらかと言えば参加したくない」と回答した生徒の理由を見ると「実際は『英語しかない環境』ではなかったため、英語が身に付いた感じがしないから」という英語キャンプに対する物足りなさを挙げている生徒もいた。一方、「初めは楽しそうだったけど、実際やってみると1泊でもとても疲れたから。私は英語未経験なのに、教えてくれる先生が少なくて、わからないのにレクとかどんどん進められたから、それ以外の生徒は英語だけの授業についていくことが難しかったため」との記述があり、英語だけの生活へのストレスを感じた参加者がいたことがわかった。なお、「参加したくない」「参加させたくない」と答えた生徒・保護者は「経験を生かせればいいので、まだ一度も参加されていないお子さんにその楽しさを体験していただくことがベストだと思います」と記入しており、英語キャンプに対する否定的な考えから出た回答ではなかった。

英語キャンプへの要望の欄には、「希望者全員が参加できるようになってほしいです。今回、うちの子どもは運よく参加することができましたが、他にもたくさんの子たちが英語に興味を持ち、意欲を持って応募していたと思います」という意見もあった。1泊2日の英語キャンプの参加費が3,000円であったことを考えると、保護者としては是非参加させたいプログラムということができるであろう。

他にも要望として「キャンプの日数を増やしてほしい」というものが保護者から14件、参加生徒からも7件あった。キャンプの日数に関しては、引率教員の動員、夏休みの部活動、教育委員会の運営の負担などを考慮すると現状通り来年度も1泊2日での実施になりそうである。荒川区教育委員会が開催した中学生対象の英語キャンプ（8月末の4泊5日）では、20名の定員に達しない年が続き、5年間開催された後、実施が見送られることになった（東，2014）ことを考えると、1泊2日の宿泊学習は、部活動で忙しい夏休み期間中に中学生が無理なく参加できる日程であると考えられる。短期の宿泊研修でより充実した「英語を使う場」を中学生に提供することが求められている。

3.2 引率教員からのフィードバック

ポストキャンプ終了後、引率教員全員で英語キャンプの振り返りをした。プレキャンプからポストキャンプまでのプログラムを振り返り、来年度に向けての改善点について自由に意見を述べてもらった。以下、項目ごとに指摘された内容をまとめていく。

3.2.1 事前の打ち合わせ

プレキャンプの日と、メインキャンプ中にそれぞれ1時間程度、英語科教員とALTとの打ち合わせを行ったが、十分ではなかったとの指摘があった。ALTの指導力によって、効果的にチームティーチングができるペアもあったが、授業内で二人の指導者のコミュニケーションがうまく取れていないペアがあったことが報告された。

参加教員全員が集まれる時間を作ることは大変難しい問題であるが、対応策として、来年度はプレキャンプを2回（6月と7月の土曜日）行い、その日に英語科教員とALTの打ち合わせをすることも提案された。

3.2.2 キャンプのプログラム

日光まで移動して行く宿泊学習なので、施設内での授業だけでなく、学外での体験的な活動ができないかという意見があった。特に、初日午後の3時間のグループ学習は生徒の集中力が続かず、また英語を使う場としてのキャンプでありながら、教室環境の中では英語を使うきっかけが作りにくかった、という指摘もあった。

また、キャンプのまとめとして2日目にグループ発表ができるように組まれたプログラムであるため、初日の活動を大幅に変更した場合、発表活動をどのように計画するか、ということも議論した。グループごとに日光を散策し、その結果を発表してもいいのではないかと、またポストキャンプまでを全プログラムと考えれば、発表はポストキャンプでやってもいいのではないかと、という案も出された。

このように、来年度のキャンプ開催に向けて、「英語を使う場」としてのプログラムに様々な意見が出された。英語を使うためには既習事項が必要であるため、中1プログラムの場合、小学校での外国語活動の学習内容が定着していることが前提となる。「もう一度英語キャンプの参加できる

とするなら、参加したいと思いますか」の質問に対して、「どちらかと言えば参加したくない」と回答した生徒は「私は英語未経験なのに」とアンケートに記入している。小学校外国語活動が必修化され、第5、6学年で週1回の外国語活動を体験していたはずであるが、「英語は未経験で、わからないのにレクがどんどん進められた」と指摘されている。「英語を使う場」としての英語キャンプに参加するためには、小学校外国語活動で英語の音声や表現に慣れ親しんでいることが前提である。葛飾区の小学校外国語活動や中1での指導の実情を十分把握した上で、来年度のプログラムを見直していきたい。

3.2.3 参加生徒の選抜

初めての試みであったため、キャンプに参加する生徒の英語力がわからず、初日は手探りでの指導であったことが英語科教員から報告された。来年度の募集では、選抜の基準を明確にし、英語漬けの生活に耐えうる意欲の高い参加者を選抜してほしいとの要望が出された。応募に際してはキャンプに参加する理由について作文を書き、提出させていたが、英語だけの生活に対して意欲的でない参加者も数名観察された。来年度は学級担任や授業を担当している英語科教員にも参加者選抜に関わってもらい、選抜の観点を明確に示した上で参加者を決定できるようにしたい。

3.2.4 指導教員

今年度は初任者研修の課題研修として、4月から葛飾区に配属された新採用の英語科教員が指導者としてキャンプに参加したが、宿泊行事の経験がないため、初任者だけでは解決できないような問題も発生した。勤務校での宿泊行事を経験した上で、2年次の教員が指導力研修としてキャンプに参加する方が効果的ではないかという意見も出されたが、英語だけで指導をするというキャンプは、指導経験が少ない英語科教員にとって貴重な体験となったようだ。教員研修としての成果については次節で考察する。

4. 教員研修としての葛飾区イングリッシュキャンプ

初任の教員11名は初任者研修としてのキャンプ参加であったため、キャンプ中、毎日リフレクション（授業の振り返り）シートの提出を課した。リフレクションについては、リフレクティブ・プラクティスの理論（玉井、2009など）に基づくが、日々の指導の中で内省したことを記録に残した。リフレクションシートは出発後と1日目終了後、2日目終了後、ポストキャンプ終了後の4回記入してもらった。各回のリフレクションシートでアドバイザーが問いかけをし、教員はその日の指導を省察して、授業日記を作成した。以下、提出されたリフレクションシートから一部を紹介する。

Reflection sheet 1（行きのパスで記入）

いよいよイングリッシュキャンプ、スタートです。1泊2日の指導を通して、英語科教員として

どのように成長したいですか。プレキャンプでの生徒の様子を思い出しながら、バスの中でしばし心を落ち着かせて、自由に書いてみてください。

「プレキャンプでは生徒たちは口数が少なく、緊張し、お互いに様子をうかがっているようだった。生徒たちの持っている力を伸ばすことができるよう、全力をつくしたいと思う」

「人とのコミュニケーションを通して、絆を深めさせ、そして共に葛飾について話し合い、学び合える研修にしたい。また、本研修を成功させ、英語教師としての更なる飛躍を図りたい」

Reflection sheet 2 (初日のプログラム終了後に記入)

Day 1の指導、お疲れさまでした！ 今日1日のうまくいったこと、うまくいかなかったことを振り返り、英語科教師としての課題を見つけましょう。

「一番の感想はI'm so tired. です。英語を話すこと、聞くことに神経を使ったのはもちろんですが、いくらこちらが話しかけても、全然会話が流れるようにならず、ネタも切れてしまう程でした。自分に足りないものがあるからだろうか？ 自分が前に出すぎているのだろうか？と悩みましたが、こんな短時間ではわからず……」

「英語で丸1日過ごすのは初めてだった。グループ・ペア・個人の場面をどう使い分けるかをもっと学びたい。英語力が落ちている。知っていた単語がたくさん出てこなくてもどかしい」

Reflection sheet 3 (2日目のプログラム終了後、帰りのバスで記入)

イングリッシュキャンプ、お疲れさまでした！ 2日間の指導を通して、英語科教師としての自信をつけたことを自由に書いてください。

「食事、風呂、就寝など日常のことを英語で話すことに自信がついた。授業の全てを英語で通すという経験が初めてだったので、生徒たちがどういう時に意欲的になり、どういう時につまずきやすいのかをつかめた」

「最後の発表がとてもよいものになった。クラスがとても静かだったことが心配のタネだったが、ALTと計画を練り直したことによって、子どもたちが最終的には満足して笑顔で発表にのぞむことができた。そこまで持ってこられたことは自信につながったし、しゃべらない子たちに有効な手立てを学ぶことができた」

Reflection sheet 4 (10月のポストキャンプ終了後に記入)

二学期の教育実践の中で、「イングリッシュキャンプの成果が出ている」と感じられることをできるだけたくさん書き出してください。

「授業において、少し言いにくいフレーズや指示など、今までは日本語で行っていたが、どのように言うのがベストか、他にどのような言い方があるのかといったことを意識して調べるようになった。今後も自身の英語力を磨いていきたい」

「キャンプでグループの担任をしたことで、学級経営や授業経営においてマネジメントの力がついた。また、一人ひとりの個性に合わせて支援する術を学んだ。ALTの先生と連携を取って

タスクをこなしていったことで教員間のチームワークを大切にし、協働することを学べた。一つのゴールに向かって皆で進んでいけたことが、今後の教員生活に生かせると思う」

初任の英語科教員にとって英語キャンプは、宿泊行事での指導、英語だけで進める授業、ALTとのチームティーチング、発表活動の指導、学級運営など様々な点で学びの多い体験であったことがわかる。特に、英語のみで授業を行うことは、初任の英語科教員にとって貴重な体験になったことがリフレクションシートの記述からうかがえる。

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(文部科学省, 2013)によると、新たな英語教育の在り方として、中学校では「授業を英語で行うことを基本的とする」とされている。教員研修は英語キャンプの主目的ではないが、結果的には教員にとって非常に充実した研修の機会となった。今後、キャンプの指導者をどう育成するかは検討していくことになるが、経験豊富な英語科教員の指導を初任者が見学できるような機会を作ることも視野に入れていきたい。

5. 葛飾区イングリッシュキャンプの成果と課題

本稿では、中学生対象1泊2日の英語キャンプについて、そのプログラムを概観し、参加生徒からのアンケート調査や参加した英語科教員からのフィードバックをもとにその成果を考察してきた。参加生徒とその保護者の回答からは、初めての試みであった葛飾区イングリッシュキャンプの成果が認められた。このような機会を継続して作ってほしいという要望も多くあった。一方、指導にあたった英語科教員からはそのプログラムの改善について、様々な意見が出された。特に、発表活動を重視しすぎると英語を使う場としてのキャンプの目的が十分に果たされないことが指摘された。

来年度のプログラム策定に関しては、発表活動の在り方を見直す必要があるだろう。発表活動がキャンプの最終目標にならないように配慮し、キャンプ2日目に発表の時間を設けず、ポストキャンプでキャンプを振り返って簡単な発表をすることも一案である。ポストキャンプを2回行うことができれば、初回で発表内容を準備し、発表練習をして2回目のポストキャンプで発表することも可能である。

短期の宿泊学習ではできる限り既習の言語材料を生かせる活動を取り入れ、「英語を教える場」にしないという視点も重要である。方略能力を育てるための活動の工夫や英語を使う際の効果的な足場組み(scaffolding)ができる指導者研修の実施も今後の課題である。各地で実施されている英語キャンプや英語村での成果を参考にしながら、来年度の葛飾区イングリッシュキャンプに向けて、プログラムをより一層充実させていきたい。

2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されることが一つのきっかけとなり、文部科学省はグローバル化に対応した教育環境作りを進めようとしている。5年後のオリンピック・パ

オリンピックで東京にたくさんの外国人を迎えることは中学生が国際社会に興味を持つ絶好のチャンスとなるであろう。「英語を使える場」を提供できる英語キャンプがグローバル社会で活躍する人材育成の一助となるよう、中学生対象の宿泊型英語学習について今後も研究を続けていきたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、葛飾区教育委員会指導室から参加生徒のアンケート結果のデータ提供及び貴重なご意見とご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。

参考文献

- 東仁美「中学生英語キャンプのカリキュラム開発—英語での「発信力」育成を目指して—」『聖学院大学論叢』27(1), 2014 pp. 213-228.
- 北海道教育委員会 (2015) 「北海道イングリッシュキャンプ」
(www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ksk/seisaku/englishcamp.htm) 〈2015.11.17 確認〉
- 毎日新聞 (2015.10.27) 「東京五輪：小中高校生向け体験型「英語村」都が検討」
(mainichi.jp/sports/news/20151028k0000m040110000c.html) 〈2015.11.17 確認〉
- 文部科学省 (2013.12.17) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf
〈2015.11.17 確認〉
- 寝屋川市教育研修センター (2015.6.26) 「平成 27 年度『英語村』」
(http://www.city.neyagawa.osaka.jp/organization_list/kyoiku_gakkokyoiku/kyouikukensyu/Village/1403002708600.html) 〈2015.11.17 確認〉
- OSAKA ENGLISH VILLAGE (2015) 「OSAKA ENGLISH VILLAGE について」
<https://englishvillage.co.jp/> 〈2015.11.20 確認〉
- 品川区 (2014.9.26) 「本格始動 小学生のためのイングリッシュ・キャンプ」
(<http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/page000023300/hpg000023223.htm>) 〈2015.11.17 確認〉
- 東京都 (2015.10) 「東京版英語村開設について 報告」
(<http://www.metro.tokyo.jp/INET/KONDAN/2015/10/DATA/40pas100.pdf>) 〈2015.11.17 確認〉
- 玉井健「リフレクティブ・プラクティス—教師の教師による教師のための授業研究—」吉田達弘・玉井健・横溝紳一郎・今井祐之・柳瀬陽介(編)『リフレクティブな英語教育を目指して 教師の語り』ひつじ書房 2013 pp. 119-190

資料 1

「キャンプで役立つ英会話」(抜粋)

5. 英語でインタビューする

What's your name?

名前を教えてください

Where do you live?

どこに住んでいますか?

Do you like baseball?

野球は好きですか?

Do you have any brothers or sisters?

兄弟姉妹はいますか?

What subject do you like?

好きな教科は何ですか?

What's your favorite TV program?

好きなテレビ番組は何ですか?

Who is your favorite comedian?

好きなお笑い芸人は?

What do you want to do this summer?

夏休みにやりたいことは?

Where do you want to go this summer?

夏休みに行きたいところは?

What do you want to be in the future?

将来どんな職業につきたいですか?

6. ALT に質問をする

Where are you from?

ご出身はどちらですか?

What's your favorite Japanese food?

日本の食べ物で好きなものは?

What do you like about Japan?

日本のどこが好きですか?

What do you do in your free time?

趣味は何ですか?

When did you come to Japan?

いつ日本に来ましたか?

Where in Japan did you visit?

日本でどこを旅行しましたか?

Can you eat *natto*?

納豆は食べられますか?

Do you speak Japanese?

日本語は話せますか?

Who is your favorite Japanese artist?

日本のミュージシャンで好きな人は?

How long will you stay in Japan?

日本にはどのくらいいる予定ですか?

Encouraging Junior High School Students to Use English through an English Camp:

A Report on Katsushika English Camp

Hitomi HIGASHI

Abstract

A two-day English camp was organized by the Katsushika Board of Education this summer. The author of this paper has developed the program for this English camp. The objectives of the camp were to give students opportunities to communicate in English in daily situations and to give them an incentive to study English. After reviewing the program of the camp, this paper intends to examine feedback from the student participants and the English teachers and discuss effective ways to promote speaking English at the junior high school level.

Key words: English camp, immersion program, teacher training, overseas study program